



### 「灰の水曜日」を迎える前に 広報・岩本

今年は年間第3主日から2月22日灰の水曜日の前の主日の年間第7主日まで、マルコによる福音の1章14節から2章12節までを読みます。

1章14節には「イエスはガリラヤに行き、神の福音を述べ伝えて仰せになった。『時は満ち、神の国は近づいた、悔い改めて福音を信じなさい』」とあります。それに続いて16節から20節で4人の漁師を弟子にします。今回はこの箇所を少し考えて見ます。

イエス様が最初に行かれたガリラヤ湖は、海拔マイナス200mという特殊な地形ですが、北の国から南に旅をする人が通る交通の要衝でした。ガリラヤのカナヤナザレなど、高台の町から湖畔までは400mくらい降ります。

ガリラヤ湖畔は湿地帯でマラリアが蔓延するところでした。だから普通の人たちが住むところではなく、地の民と言われる差別の対象になっている人たちや、通行税を取る徴税人や、漁師たちだけが住んでいたと言われています。

イエス様は伝道の最初に社会の底辺にいる人たちの所へ行かれました。そのことからイエス様が福音を誰に一番先に伝えたかったかが分かります。そしてイエス様はそこで弟子を見つけました。

最初の弟子はシモン(ペテロ)と弟のアンデレでした。18節には「2人はすぐに網を

捨てて従った」と書いてあります。漁師にとって一番の財産は網です。漁師が生活の基になる網を捨てて従うことは大変なことです。二人の心の中には何が起きたのでしょうか。

次に弟子になったのはヤコブとヨハネでした。イエスが呼ぶと「この2人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に船に残して、イエスの後について行った。」この2人も家族を捨ててイエス様の所に行きます。

イエス様に呼ばれた弟子たちの話は、イエスに従うということは全てを捨てて従うことと言っています。私たちはどうでしょうか。

私たちには家族との日常生活があり、楽しみや趣味もあります。すべてを捨てるのが出来ますか。駄目人間の私には不可能です。

灰の水曜日を迎える前にマルコによる福音書を読み、信仰を新たにして四旬節に入りたいものです。そして、神に生涯を捧げた聖職者の信仰と祈りによって、教会が支えられていることも忘れてはいけないと思うのです。

「からしだね」創刊の思い出・・・	2面
子ども達のページ・・・	3面
委員会等報告・・・	4面
心の健康セミナー・・・	5面
1日黙想会報告・・・	6面
教会学校のページ・本の紹介・・・	7面
おしらせ・・・	8面

## 「からしだね」創刊の思い出

山口 隆

広報委員会より、「からしだね」創刊当時の思い出を書いてくれとの依頼を受けましたので、覚束ながら記憶を辿ってみたいと思います。

当時の水巻教会は主任司祭がラバルタ神父様からベリオン神父様へとバトンタッチされ、40代だった若い神父様の元、すべてを刷新しようと機運がみなぎっていました。それまで、教会役員の前、地区役員とわずかな聖書グループしかなかった組織を、多くの信者に積極的に様々な活動に携わってもらおうと、実年会、壮年会、青年会、高校生会など、年齢に応じた会を作って活動を開始しました。

その中で、壮年会活動の一環として、壮年会の活動を知ってもおうと「壮年会だより」というB5サイズの読物を発刊することにしました。これが「からしだね」の源です。壮年会の議事録のようなものでほとんど、個人で作成、当時壮年会の会長だった川島さんに目を通してもらいそれを印刷し、配布しました。

1987年2月に創刊されてからわずか3号の「壮年会だより」でしたから、覚えておられる方も少ないでしょうが、編集の苦労もそれなりにあって、懐かしい広報紙でした。

「壮年会だより」から「からしだね」へと変わったのは、個人的にある教会の広報誌を見てからの事。手書きB5サイズの5、6ページほどのもので、教会内の出来事が実に生き生きと描かれており、こんな広報誌が、水巻にも有ったらと思いました。その思いを永年温めていましたが、87年5月専用ワープロを購入、壮年会の折、この件を議題にかけ

ると幸いにも、快諾して貰い発刊の運びとなりました。

教会の広報誌ですから、「壮年会だより」の様に個人編集というわけにいかず、委員会組織も整って、昭和62年5月創刊号発行。当時の編集委員は、松尾隆さん、秦野さん(奥さん)等数名でした。

「からしだね」の命名は「壮年会だより」最終巻の3号で広報紙タイトル募集に応じて集まったいくつかの案から決めました。聖書にある【からしだね】の喩から「もっとも小さなものが大きなものに成長する」、からしだねを目指しての命名でした。

B4サイズ片面、当時の専用ワープロ編集の限界で、紙面のバランスをとるために切ったり貼ったりと大変な作業でしたが、なんとか「からしだね」が出来上がった時の嬉しさは例えようもないほどでした。

その後、編集委員も増え、早くも3号にはB4両面刷へと紙面倍増しました。イラストの上手い松尾恵子さんやワープロの得意な永谷律子さん(旧姓)、オールマイティの小笠原知子さん(後には圭子さんも)の参入はどれ程力になったことか(感謝)。日曜日のミサ後から編集が始まり、全体の校正、訂正が終わるのは、午後11時ころといったハードな時間になったことも度々でした。

そんな創刊当時から早くも20数年。「からしだね」が300号に達する。感慨無量です。

おめでとうございます。これまで、編集に携わってくださった多くの方々。そして、いつも力付けて下さった読者の方々。そして、今も頑張っていて編集に携わっている編集者の方々。共に祝いたいものです。



こんげつ せんげつ つづ  
( 今月は先月の続きです )

この 幻 を見たアナニアは「主よ、わたしは、その人がエルサレムでああなたの聖なる者たちを苦しめたのを知っています」と言います。

すると主は「あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ者である」と言いました。

アナニアは出かけて行って、サウロの上手に手をかざしたところ、サウロの目が見えるようになりました。

そこでサウロは 体 を起こして 洗礼 を受けました。 食事 をして 元気 を取り戻しました。これが有名な「パウロの回心」の話です。

その後、サウロはダマスカスの町に出かけていって、キリストの福音を話しましたが、人びとは、「あの男はエルサレム

でキリストの名を呼び求める人たちを苦しめていたのではないか」と言いました。

サウロはダマスカスでイエスのことを話していましたが、ユダヤ人たちがサウロを殺す計画を立てて狙い始め、逃げ出さないように昼も夜も街の門で見張っていました。そこでサウロの弟子たちが連れて行き、夜の間にサウロを籠に乗せて城壁の外に下ろして逃がしました。それからサウロはエルサレムに行きました。

先月と今月のパウロの話は、使徒言行録の9章に書いてありますので読んでみてください。

それから、この話に出てくる、「直線通り」「ユダヤ人の家」「かごで降りた城壁」など、聖書に書いてある場所の名前などは今もあります。

聖書の物語は昔の話であっても実際にあった話なのです。

## 委員会等報告

2012年1月分

## 1月度小教区委員会

1月8日

## 1. 前委員会の議事録確認

①募金(聖堂入口にて)、12月4日、11日。

12月18日には有志が、街頭募金

②シャッター工事、25万5千円

営繕費、ほか、募金を募る(11月6日  
~27日)

③小教区親睦会

カレー100食、焼き鳥(有志で)、タピ  
オカ、コーヒー各100円(中間地区)④降誕祭前夜祭 豚汁と炊き込みご飯、  
各々150食

## 2. 先月の行事報告(抜粋で記述)

- ・11月3日(木)召命の集い 20名参加
- ・12月24日、降誕前夜祭 200名程度参加

## 3. 議題

- ①各委員会予算案提出 1月末。
- ②下水道工事「聖堂・信徒会館」部分、「司祭館・幼稚園」部分  
それぞれが66万円、118万円。後者は教会と幼稚園が折半。

当教会では、営繕積立金から。万一、不足の場合、総会にかけて決める。

③アクショングループのメンバーの呼びかけ(教会の一般信徒に、何かの役割を持って貰う) 仕事・役割の表を貼り出し、申し出を募る。(1月中旬~2月いっぱい)

- ④総会 5月20日(日)予定、  
納骨堂利用者集会 4月22日

この前後(総会以前)に地区集会

## 4. 各委員会

・屋根の保守点検 今年には下水工事に出費するので、延期の可能性。

尋ねるのみに(田中税さん)。

## 5. その他

- ・緊急連絡網について  
(ほぼ安息の会が使用)
- ・北村神学生の送別会 1月29日。  
お菓子など準備(事務局)、他に有志の提案歓迎する。

## 6. これからの活動

- ・1月15日(日)馬小屋、イルミネーションの片付け
- ・馬小屋の土台の板が、折りたたみにできればよいが。大工さんに聞く。(当面検討)
- ・1月29日、神学生送別会
- ・2月5日(日)聖歌講習会、深堀先生
- ・2月22日(水)灰の水曜日  
時間 9:30、19:30
- ・2月26日(日)四旬節開始



## 小宮豊師による心の健康セミナー：心身の病いとその救済

1月15日(日)午後2時より黙想の家ログハウスで、「心の健康セミナー冬：心身の病いとその救済」が行われました。

普通、病気には原因があります。例えばコレラ菌に感染すれば結果的にコレラになります。その病気はコレラ菌を叩くことが救済につながります。人間の存在の一部である精神が病んだ時に対応するのが精神医学です。しかしその原因は定かではありません。最近の内服薬が使われていますが、原因を叩くことはできないのです。

人間はもともと自分自身にしがみつく自己中心な存在です。「この私」という存在は決して類型化されえない。しかし実際は教育、社会生活を通して、様式化、類型化、標準化の方向に進んでいます。自然界においても、絶滅危惧種の増加に見られるように種の多様性は減少し、野菜や家畜の工業製品化、国家による教科書検定をうけた教育の一元化により、同じ者の再生産という現実があります。いかにして人間は「個」：他者と取り替えの出来ない固有の存在であり得るのか。

哲学者たちは、社会と人間、神の存在について論理を展開し解説しています。

『人はよりよく生きようとして、絶えず他者と闘い、他者を傷つけ、他者に傷つけられざるを得ない状況に追い込まれる。また、ふだんは忘れていたが、自己の死は必ずやってくる。病いはそうした生命への脅威を目に見える形でみせてくれる。そうした危機の場面で、救済宗教は現世的存在としての人間の限界を超えて、永遠なるものの相のもとに人生全体、世界全体を見直す構えを示すのである。…克服困難な苦難の向こうに、奇跡のように光りあふれる至福が待っている。救済宗教は、人間の限界を強調しながらも、そうした限界をいわば劇的に超えていく可能性を示す。…救済宗教においては、エクスタシーや融合感やカタルシスは苦難から救いへの逆転の栄光、あるいはその先取りとして体験されるのである。…そのことによって、日常の快不快のサイクルからの自由と喜びの感情を背景とした内省の可能性もまた開ける。』

(島菌進：「現代救済宗教論」来住神父提供)

精神科医の役割は、心に病いを持つ人が「生」を全うするために援助することです。日本での精神病患者の収容期間は900日、外国(イタリア)では15日といわれます。これは、日本社会に心の病いについて偏見があり、精神障害者(人口の3.6%が発病)を受け入れるための社会資源が乏しいということです。

\*次回「心の健康セミナー春：病いと付き合い方」：5月13日(日)午後2時

黙想の家ログハウス 原則無料(自由献金)福岡教区報でもお知らせします。

レポートと連絡先：矢田公美



## 「苦しんでいる人たちに寄り添う主とともに」1日黙想会報告

1月14日(土) 参加者14名、中井淳神父様(細江教会司祭、イエズズ会)の指導で、四回の講話、ギターによるテゼの短い歌と霊想、心に語りかけてくる黙想の一面を報告します。

東日本大震災の現場ベースキャンプ釜石と石巻の二箇所に駆けつけ「心のケア」にかかわられた神父様の体験をヨハネ福音書に照らしながら、イエス・キリストは、私たち一人ひとりに回心するよう呼びかけ叫んでおられる・・・と述べられました。

新しい創造(カトリック仙台司教区 東日本大震災救援・復興活動にかかわる「新しい創造」)

### ①死に向き合う者への創造(回心)

・カトリック釜石教会信徒小野寺哲(おのでらさとし)さんは、ボランティアの人(信徒半数とそうでない人半数)の朝夕のミーティングで報告・連絡・相談があり、それに合わせた朝夕の祈り・・・がある。神の恵みに感謝する日々だと言う。

・長崎教区の介護職江藤さおりさんは、ひとつの町が丸ごとなくなった石巻市雄勝町でハゲワシとカラスの群れ(その下にはご遺体がある)だけの現地に入り「神様助けて下さい」と叫ぶうずくまってしまった。生き方が変わり、ささやかな毎日の中に宝を探すようになったと言う。

### ②謙遜な者、小さな道を行く者への創造

何をもって日本の復興なのか? それは自然に対して、死に対して、他者に対して何も出来ない無力さを受け入れることだ。と『復興の精神—無力者の視線—』の著者である禅僧・南直哉(みなみじきさい)は言う。何でもできるという傲慢から解放されないといけない、原発は人間の思いあがりの象徴。

### ③寄り添う者への創造

・「高座から説教をする仏教から、地を這って人々の「苦」に寄り添える仏教に戻れるかどうか・・・」(高橋卓志「大津波がのみ込んだもの」『大震災の中で—わたしたちは何をすべきか』) 仏教をキリスト教またはわたしに置き換え問い直すこともできる。

・釜石の避難所でスピリチュアルケアを続けている宇根さんは、カリタスが出来ることは共にいること(解決しようとしないうbeing)です、無力感の共有ですと言う。

### ④イエスの渇きを潤す者への創造、み心の信心

十字架につけられ死の間際にイエスは「渇く」と言われた。(ヨハネ19:28) マザーテレサはカルカタへの汽車の中でイエスの「渇く」を聴いたと証している。小さく弱くされている人の中、「渇き」にイエスはいる、そして潤されることを待っている。

また復活されたイエス・キリストは傷がそのまま残った姿で私たちに寄り添おうとされている。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。」(ヨハネ20:27) 以上

報告者 ペルーの貧しい子どもを支えるレプトン会 世話人 岩本ナセ





# 教会学校のページ



## 初聖体クラス

1月8日

- 1 5つの祈りをしました。
- 2 テキスト34「ごせいたいを いただいてからの 祈り」

1月22日

- 1 5つの祈りをしました。
- 2 テキスト「ごせいたいの いただきかた」



## 3～6年生クラス

1月8日

マタイ福音書2章1～12について、みんなで再読しました。  
使徒信条の音読をしました。

1月22日

ガリラヤ地方の地理的理解をしました。  
新年の目標を決めました。



### 《本の紹介》

石が叫ぶ福音 一喪失と汚染の大地から一 岩波書店

著者：林尚志

2,625円(税込)

1934年、東京生まれ。新潟への疎開経験をもつ神父は、自らを「疎開派・焼け跡育ちで、国民学校を1年～6年までフルコースやった日本人唯一の世代」と称する。70年に山口県の細江教会(下関市)に赴任した後、宇部教会、彦島教会(下関市)を経て、88年より下関労働教育センターを拠点として活動する。

常に現場に身を置くこと、そして歴史の重荷と社会の歪みを負って生きようとする人々とともにあって、そこから希望を「学ぶ」という一貫した姿勢をもつ、戦後の証言者の一人。

「石が叫ぶ福音」が出版されました。この世界に新しい彼岸の花が咲くことを希望とする、著者の祈りを聴いてください。



「原子炉の燃料棒に結晶していた価値観と国家構造とは、国民に死の灰を浴びせ、レッドカードで退場になった」3.11後の東北に、基地の沖縄に、東ティモールに、シャッター通りに…現場を走り続けた戦中派の神父による戦後日本の記録。小さな出会いから生きる力を拾い集め、鎮魂と再生のための石碑を建てる。今、ガレキの中から希望を紡ぎ出すために。



# 2月のみしらせ

## ★東日本大震災募金★

福岡教区被災者支援室へ

309,408円

ご協力ありがとうございました。

## ★子ども達が集めた募金★

47,170円

カリタスジャパンへ 27,170円

美野島司牧センターへ 10,000円

水巻町社会福祉協議会へ 10,000円

ご協力ありがとうございました。

## ★2月5日 聖歌練習★

講師 深堀 純先生

午前の部 ミサ後すぐ 聖堂にて

午後の部 昼食(弁当)後、聖堂2階にて

2月・聖週間の聖歌を中心に練習

します。たくさんの方の参加をお

待ちしています。

## ★特別寄付★

吉田地区の頭島美代子様より、寄付がありました。ありがとうございました。

## ★灰の水曜日 ミサ★

日 時：2月22日(水)

午前9時30分・午後7時30分

この日は、午前と午後の2回ミサがあります。



人-ひと

【帰天】安らかに！

12月21日

本田 實さん(吉田地区)



レプトン会のみな様

クリスマスと新年 おめでとうございます。

昨年はお世話になりました。本年もどうぞよろしくお願い致します。

温かいもてなしを受けたままですが、その後いかがお過ごしでしょうか。

私は2月29日に帰秘するようにと、先日ペルーからの知らせが届きました。

急なので一応お知らせいたします。

では教会の皆様にもよろしくお伝えください。

寒冷の候どうぞ御身ご自愛くださいませ。

イエスのカリタス修道女会

シスターイグナツィア 古川